

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2001) 2巻1号:92-94.

学会の動向:第47回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会を終
えて

千石一雄

学界の動向

第49回日本感染症学会東日本地方会・
第47回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会を終えて

千石 一 雄*

昨2000年、石川睦男教授を会長として6月9日、10日に第10回日本産婦人科・新生児血液学会、7月27日、28日に第23回日本産婦人科ME学会、10月6日、7日に第49回日本化学療法学会東日本支部総会を主催させていただいた。このうち日本化学療法学会東日本支部総会に関し報告させていただく。

本学会は正式には日本感染症学会東日本地方会との合同学会であり、日本感染症学会東日本地方会を札幌医科大学泌尿器科塚本泰司教授、日本化学療法学会東日本支部総会を当教室の石川睦男教授を会長として旭川グランドホテルで開催した。本学会は感染症の診断・治療・予防、化学療法に関する基礎的・臨床的研究の発展を目的として、臨床医学、基礎医学さらには保険医学などの分野を包括した学会であり、大変幅広い分野の会員により構成されている。近年 emerging あるいは re-emerging disease と呼ばれる感染症、各種薬剤に対する耐性菌の出現、AIDSをはじめとする性感染症の蔓延など感染症の変貌は著しいものが、感染症および化学療法に対する研究は極めて重要な意義を有し、本学会の重要性も益々指摘されている。また、本学会は約50年に上る歴史を有し、これまで北海道でも3回開催されているが、すべて札幌が開催地であった。1977年の合同学会は開催地は札幌であるが、今回と同様、札幌医科大学泌尿器科熊本悦明名誉教授と本学小児科の吉岡一名誉教授が会長をなされており、今回、旭川で初めて本学会を開催できたのは、偶然とは言いがたく、その準備にたずさわることができたことは光栄である。

2つの大学の、しかも分野が異なる教室が合同で主催する学会であり、学会の準備にあたっては、札幌と旭川でたびたび打ち合わせを重ねなければならず、通常とは異なり、難しい点もあったが、札幌医科大学泌尿器科の先生方とも親交を深めることができ貴重な経

験をさせていただいた。幸いにも、全国から107題の一般演題をいただき、その他、招請講演1題、特別講演2題、教育講演2題、シンポジウム2題、6題の教育セミナーとイブニングセミナー1題をプログラムとして組むことができ、また、約700人にも上る参加者があったことに今更ながらほっとしている。

ここで学会の内容に関し少し紹介したい。招請講演はペンシルバニア大学の David Weiner 教授に「HIV-1 に対する DNA vaccine」に関する講演をお願いし、最新の成績が紹介された。HIV-1 に対する Plasmid vaccine により免疫反応の誘起が可能であり、DNA vaccine は将来的に極めて期待される治療法であるが、臨床応用には今後、免疫反応をより効率よく誘起するための plasmid vaccine のデリバリーシステムの基礎実験をさらに加える必要があるとの報告であり、話を理解することは容易ではなかったが、その研究に対する真摯な態度と夢のある内容に感激する講演であった。特別講演1は北里大学の砂川慶介教授をお願いし、「抗菌剤の開発—現状の問題と今後の課題」と題して行われた。我が国の抗菌薬開発は1996年以降激減しており、その原因として抗菌薬の臨床開発に時間がかかりすぎる現状を平易に解説された。これは、新 GCP ガイドラインの設定による同意取得の困難、ドロップアウトの増加によるのが一因と考えられ、今後ブリッジング試験などによりある程度解決されるが、逆に、我が国における臨床知見の空洞化が助長され、日本で開発される薬剤のオリジナリティが損なわれる問題点を有していることを指摘された。この問題は、日本での製薬会社の生き残り、また、病院の生き残りに直接関わる問題であり、学会の対応を含め注目される。特別講演2は北海道大学の浅香正博教授より「胃癌は感染症か？」と言う魅力的なタイトルでヘリコバクター・ピロリと胃癌の関連に関する講演をうかがった。

* 旭川医科大学 産婦人科学講座

講演では、ヘリコバクターピロリ (HP) 抗体価は分化型早期胃癌の発生と関連し、HP 感染が、急性胃炎、萎縮性胃炎、腸上皮仮性を経て、主として分化型の早期胃癌を発生させる可能性を強く示唆する成績を報告された。逆に、進行胃癌に至るまでには、腸上皮仮性の範囲が益々広がっていくため HP は胃内より消失し抗体価は低下すると推測され、これまでの報告で HP 抗体価と胃癌の発生に関し意見が分かれていたのは対象に進行癌を多数含んでいたことに起因することを、門外漢のわたしにもわかるように解説され、胃癌発生頻度の高い我が国において世界をリードする研究を推進することの重要性を説かれていたことに感慨を覚えた。教育講演 1 は本学の寄生虫学講座伊藤亮教授に「エキノкокクス症血清診断法の現状と問題点」に関し解説していただいた。問題となっている多包虫症についての血清学的確定診断法、予後判定法を旭川医大で確立されていることの紹介があり、この方法により確実な術前診断、疫学調査が可能になることを紹介され、旭川ならではの講演として関心が寄せられた。教育講演 2 は東京大学医科研の笹川千尋教授が「腸管系病原細菌の付着と侵入」と題して O-157 の腸管への付着機構および赤痢菌の上皮細胞侵入と拡散機構に関して分子機構や細胞骨格のダイナミズムの観点から紹介された。最新の研究成果の発表であり大変興味深い内容であった。シンポジウムの一つは、学会の主催が泌尿器科と産婦人科であることから、「STD の予防と治療」に関する話題を提供していただいた。ヒトパピローマウイルス、クラミジア感染、性器ヘルペス、コンジロームに関し産婦人科、泌尿器科、皮膚科の立場からそれぞれ紹介された。ヒトパピローマウイルスと子宮頸癌の発生に関しては従来より多くの検討がなされているが、パピローマウイルスが子宮頸癌発生の必要条件の一つではあるが十分条件ではないこと、子宮頸癌発生の危険度を評価するコホート研究の進捗状況、そしてパピローマウイルスの予防ワクチンの開発の現状の発表があり、ホットなディスカッションが交わされた。クラミジア感染に関しては女性、特に若年婦人の感染率が最近著明に増加しているとするショッキングな報告がなされ、今後の啓蒙の重要性が改めて議論された。性器ヘルペスに関しては本邦における抗体保有率が低いことから、今後の発生増加が予想され発症初期の治療の重要性に関し意見が交換された。STD は各種の学会で取り上げられている話題である

が、それにも関わらず若年者を中心に増加している現状に対し改めて早期の積極的な対応が具体的に提示されなければならない状況にきている印象であった。シンポジウム 2 は「感染免疫と粘膜免疫」を取り上げた。気道粘膜、腸管粘膜など粘膜内空の表面積は広大であり、また、常に体外環境と接触があることより、粘膜免疫は第一線の生体防御システムとして、体内環境を守り生体の免疫学的恒常性をコントロールする免疫機構の根幹をなしている。最近の知見から粘膜局所で免疫学的寛容と活性化が精巧に制御されていることが明らかになりつつある。シンポジウムでは腸管関連リンパ組織および鼻咽頭関連リンパ組織の免疫生物学的検討とそれを応用したワクチンの開発状況が報告され注目を集めた。また、繰り返す呼吸器感染症における MBL 遺伝子多型、小児 RB ウィルス感染におけるサイトカイン、ケモカインの動態、腸管感染免疫機構など、教育講演の内容とオーバーラップする事も多く、活発な討論がなされ意義のあるシンポジウムであったと振り返っている。

第一日目の最後にはイブニングセミナーとして「surgical site infection」を取り上げた。外科、泌尿器科、産婦人科の 3 人の演者から、それぞれの分野における術後感染の現状およびその予防に関し発表された。外科、泌尿器科領域では compromised host に対する手術適応の増加により近年 SSI の上昇が認められ、緑膿菌の分離頻度が高く、その対策に苦慮することなど、フローアからも活発な意見交換がなされた。産婦人科領域では当教室の林講師が術後感染予防を目的とした抗菌剤の使用法に関し教室のデータを中心に発表し注目を集めた。

一般演題では薬剤耐性に関する演題が注目された。呼吸器感染症分離菌調査研究会から呼吸器感染症における肺炎の増加、分離菌の 30% 以上がペニシリン耐性肺炎球菌が占めている一方、MRSA の分離頻度は横這いであり、分離菌の様相、薬剤感受性も使用薬剤の多様化により変化していることが報告された。さらに、この変化を十分に認識したうえで抗菌薬を使用すべきであるとする説得力のある講演がなされた。また、緑膿菌においてはカルバペネム系、アミノグリコシド系薬はもちろんのこと、ニューキノロン系薬に対する耐性化が進んでいるとする報告もなされ、臨床の立場から抗菌剤の使用法に関し大なる反省と見直しに関し、改めて考えさせられた。その他、2 日間の昼

食時に教育セミナーとして6題の講演をお願いした。各々お弁当が足りなくなるほどの盛況であり、また、講演も大変充実したものであり、関係各位に感謝申し上げます。

第一日目終了後は懇親会が行われ、特別なアトラクションを予定せず、ラーメン、蟹、イカ、男爵いも、石狩鍋など北海道の味覚を満喫していただいた。350人以上の予想を上回る参加をいただき、主催者側として嬉しい思いであったが、実際には、食べ物が足りなくなるのではないかと心配でビールもあまり進まなかったことを思い出す。

予想もしなかった点で様々な問題も持ち上がり、不備も多かったものの、2教室で予定した講演、シンポジウムには多くの関心が寄せられ、プログラムとしてはおおむね好評であったとする感想をいただいた。逆

に、欲張り過ぎたために、タイムスケジュールがタイトになり、参加者に旭川を楽しむ時間を提供できなかったことは反省点である。幸い、学会終了翌日は休日であり、多くの方々が北海道見学をして帰られたようであり、胸をなで下ろしている。

昨年の3回の学会を経験し、学会の運営は simple にすべきであるとする認識に立ち、感染症・化学療法合同学会では、できる限り垂れ幕、座長の名札などを省略させていただき、懇親会でもアトラクションは予定せず、旭川の味を提供することにした。おおむね好評であったと密かに自負している次第である。

最後に、講演の座長を快く引き受けていただいた本学第3内科高後裕教授、臨床検査医学伊藤喜久教授、また、ご協力をいただいた方々に感謝申し上げます。